

## 佳作

### 本気の涙

青森県むつ市立大平中学校

3年 廣崎 未来

私は誰よりも負けず嫌いです。特にスポーツで負けるのは本当に悔しくてたまりません。

私は4歳のころ、大会で入賞した姉の姿を見てソフトテニスを始めました。そのときも、

「なんでお姉ちゃんが入賞したんだろう。」

「私はお姉ちゃんよりもうまくなる。」

という負けず嫌いがあふれていました。姉よりもよい結果を残したい、絶対に負けたくないという思いは14歳になった今も変わっていません。

私は、1年生のときに県大会を勝ち進み、東北大会に行きました。中学生になって初めての大舞台となる東北大会。特別な空間に立ち、私はとても感動しました。

昨年の7月。地区1位として出場した県大会。「またあの大会に立ちたい」という強い思いを胸に臨みました。2回戦までは順調に勝ち進みました。「絶対行ける」と心の中で浮かれていたのかもしれませんが。3回戦の対戦相手は、県大会に何度も入賞しているペアでした。この調子なら大丈夫と思って戦っていましたが、気づけば簡単に負けていました。しかし、私の頬に涙は流れませんでした。いつもはすぐに悔しさに泣いてしまうのに……。自分でも不思議でした。結局、昨年の県大会は個人も団体も勝ちあがることができず、東北大会には行けませんでした。

この大会の後、私はなぜ悔し涙が出なかったのだろうと考えました。私は、悔し涙は本気で頑張った人だけが流せるものだと考えています。涙が出なかったということは、自分が本気で練習できていなかったということではないか……。そのことに気づいたとき、私は自分の甘さを感じました。そして、自分自身に誓いました。中学校最後の大会となる来年の県大会は、負けてもすぐに悔し涙を流せるくらい、勝ったらすぐに嬉し涙を流せるくらい、これから1年間本気で練習すると。

それから私は東北大会出場を目標に、打つ練習も、トレーニングも、誰にも負けたくないくらい必死に頑張りました。他の人よりも1球でも多く、1秒でも長く、一歩でも遠くへということ意識し続けました。同年代の人や一般の人ともたくさん練習試合をしました。本気で走って、本気で打っても、たくさん負

けました。負けるたびに、自分は本当に大丈夫なのか、間違えていないかなど自問自答しました。自分を見失いそうになったこともあります。それでも、最後の県大会で勝ちたいという強い思いが私の命綱となり、耐えることができました。

今年の7月。中学生として臨む最後の県大会。私は不安でいっぱいでした。一つでも負けたら終わってしまうというプレッシャーを感じていたからです。しかし、一方では1年間本気で頑張ったから大丈夫だという自信もありました。「あとは全部出し切るだけだ」と自分に言い聞かせて試合に臨みました。

4回戦まで順調に勝ち進み、運命の5回戦。勝てば東北大会確定という大一番でした。私は緊張していましたが、「今までの自分を信じよう」と自分自身を奮い立たせてコートに立ちました。ファイナルゲームまで追い込まれましたが、最後は私とペアを組む選手が決めてくれました。勝利が決まった直後、私の頬には涙が流れていました。その涙は嬉し涙でした。1年間本気で頑張ったよかった、今までの自分を信じてよかったと、心の底から思いました。

私にとって「負けず嫌い」や「悔し涙」は、目標を達成する瞬間の「嬉し涙」の源水です。目標達成に向けて努力しても、すぐには報われないかもしれません。誰よりも頑張ったのになぜ自分だけ報われないのだろうと思うこともあるかもしれません。しかし、勝負のときは、それまでの自分を信じるしかないのです。私は、過去の自分は絶対に裏切らないと思います。

私のエネルギーは、本気で感じる悔しさと本気で流す悔し涙です。最後に本気の涙を流すためには、普段から本気で頑張らなければなりません。どんなにつらくても、どんなに苦しくても、今までの自分を信じたいといつでも思えるまで、私は絶対に逃げません。それが、私にとって目標を達成するまでの命綱だからです。これからの人生を自分らしく生きるための一つの大きなエネルギーとして、私はこれからも本気で悔しさを感じ、本気で悔し涙を流しながら、一步一步前進していきます。